

【論文要旨】 『曾我物語』の虎御前にまつわる伝承の生成と展開

——東アジア文化における虎表象の視点から——

城西国際大学大学院 人文科学研究科比較文化専攻

新村 衣里子

中世の作品である『曾我物語』に登場する大磯の遊女・虎御前は、曾我十郎の恋人である。同時に、敵討を遂げて横死した曾我兄弟の鎮魂供養の面でも、重要な役割を果たす人物である。物語の中で、虎御前は駿河国小林郷の森の社で御霊神として祀られた十郎の声を聞き、最晩年に曾我の地で桜の木に亡き十郎の姿が現じたのを見た、という設定になっている。そのような人物造型は、虎御前が境界に在る女性としての性格を有し、霊的な存在と交流が可能であったことを示唆するのに効果的な役割を果たしている。

本研究では、中世文学や中世史学、口承文芸学、比較文化学といった観点から、虎御前という女性に託された思想を多彩な観点から捉えることを意図して、『曾我物語』の虎御前にまつわる伝承について検討した。特に近年進展著しい東アジア交流関係分野の研究成果を取り込み、「虎」の名を持つ女性に仮託された思想や信仰を読み解くという作業を行った。

ここで「東アジア」の用語について確認しておく。西嶋定生氏による東アジア世界論は、日本の歴史を孤立したものとして捉えるのではなく、東アジアという海域にある地域として、大陸との相互関係の中で捉えていこうとするものである。西嶋氏によれば、東アジア文化圏とは、中国の王朝による冊封体制を基盤として伝播した、中国に起源を持つ文化（漢字、儒教、律令制、漢訳仏教）の影響を受けた文化圏であり、こうした文化圏と政治圏とが一体となった、中国・韓国・日本・ベトナムが「東アジア世界」であるとして定義されている。本研究では中国や朝鮮半島の文化を主眼とするため、表題において「東北アジア」と称すべきであろうが、諸先学の研究で使用されて一般的に馴染みのある「東アジア」という語を用いる。

従来、『曾我物語』における虎御前像の造型について、日本という領域の外からの影響、すなわち大陸由来の思想の影響については指摘がなされてこなかった。しかし中世は、日本の境界や他国との位置関係が意識された時代であり、それは中世日本図（金沢文庫所蔵、妙本寺所蔵）の存在からも知られる。こうした時代背景も視野に入れて、考察を行った。

全国に虎御前にまつわる史跡が残されているのはなぜか、という問いに対して、先行研究では、民俗学の分野からの柳田國男氏による指摘がある。女人結界に關与する「トラ・トラン・トウロ」といった名前は「石の傍で修法をする巫女の称呼」であり、「道仏の間を行く一派の女巫を意味した古い日本語」であったかとする説で、虎御前像の研究において影響力を持ってきた。その後、会田実氏によって、呪的意味合いを有する三つの寅が揃った出生（「三寅」）が「トラン・トウロ」へと逆訛伝した可能性もあると指摘された。

こうした従来の研究を発展させて、本研究では、「虎」という名前には動物の「虎」に対する思想や信仰が投影されており、異界・神仙世界と通ずるような、境界性を持った神秘的な名として受容されていたのではないかと論じた。

本論文は、以下のような構成で展開している。

序章では、東アジア文化における日本、すなわち大陸文化の影響を受けた日本における虎御前像といった視点の重要性や、『曾我物語』の真名本と仮名本の相違点を確認した。

第一章では、巨視的な視点から東アジア文化における虎表象を検討した。その結果、中国や朝鮮半島といった大陸や日本における虎表象として、「(1)龍に対応するもの、(2)武威、武力、軍事と関わるもの、(3)山神や山姥と同一視される存在、(4)呪的な力や神秘的な力を持つもの、境界にあって鎮魂や辟邪に関与するもの、(5)高僧や神仙など、宗教的な人間に関与する存在、(6)異類婚姻譚に表れる虎、(7)毘沙門天に関わる存在、(8)孝心を持つ者や英雄を援助する虎」といった認識がなされていることが確認できた。特に、虎が身近な存在ではない日本においては、虎の遺物や伝承をもとに想像力で補っていくこともあり、憧憬やエキゾチシズムが加味されていったとも言える。

第二章では、中世の文学作品である『曾我物語』において、虎という女性が重視されていることを確認した。緻密な物語構造を持つ真名本で、既に指摘があるように、物語に記された年齢を考慮すると、虎御前は寅年生まれであるとは言えない。それにもかかわらず、あえて干支の寅が揃った出生をしたと設定されたのはなぜか、ということについて、先行研究に依拠しながら考察した。古来十二支の寅に関連した誕生をした者には、「トラ」という名がつけられる場合があった。寅が揃った出生というのは、虎に対する辟邪のイメージや信仰が反映されて、神性を持つと受容されていたと考えられる。元々虎という女性が平塚、大磯に実在していたかという点については判然としないが、本稿では、真名本が作られていく過程で、曾我兄弟を支え、鎮魂の役割を果たす女性として説得力を持つ、といった構想のもとに、「虎」の名を持つ女性像が造型されていったと考えた。また、真名本『曾我物語』が、日本の領域や境界を意識した語り方をしていることを先学の研究をもとに確認したうえで、境界に関わるトラや毘沙門信仰について考察した。

第三章では、虎御前が遊女として拠った大磯は、中世において、渡来系の異国的な雰囲気をもつ地であり、流動性を持った地であるとして認識されていたことを確認した。虎御前が、大磯を拠点とする女性として誕生した背景としては、角川源義氏が指摘するように、真名本成立圏である箱根山や伊豆山に関与する権現が、まず異国から渡来した地が大磯であったことが作用していると思われる。大磯にあった高麗寺は、後白河法皇四九日仏事や、北条政子の出産のための祈祷など、鎌倉幕府による信仰の篤かった社寺のうちの一つであった。それに加えて、源頼朝による政権が鎌倉に置かれたことによって、東海道の往来が増加し、大磯が街道沿いの宿として繁栄したことも重要視した。さらに、もともと「こゆるぎ」として持っていた大磯のイメージが、虎御前像の造型にも影響を与えていったと考えた。そして、真名本において曾我という地が、曾我兄弟の母親像に代表されるような養育、再生の空間として捉えられていることを踏まえ、箱根で出家して諸国を巡礼した虎御前をこの地に据えることで、往生の空間という特性が、曾我に付与されたことにも着目した。また、中世に流行した「大磯小磯」という言い回しから、大磯は「小磯(恋)」を導く印象を持つ地であることを、平安末期成立の『梁塵秘抄』を素材として探っていった。

第四章では、真名本『曾我物語』では山神信仰が重視されていることを確認した。作品

の成立に関与したとされる箱根修験と深く関わる足柄の地が、山神による産育や養育のイメージの土壌となっていた可能性についても検討した。また、熊野本地譚を語り伝える熊野比丘尼の姿が、『曾我物語』の虎御前に投影されているという先行研究をもとに、親の不在という環境に置かれた子が、虎による養育や守護によって英雄と化するという認識が、『曾我物語』の制作者側にあったのではないかと推察した。さらに、動物の名を持つということは、当該動物と同様の存在であるという認識があり、同一視されるがゆえに双方とも交替可能であるという思想が、虎御前像の形成に影響を与えたのではないかと結論づけた。

第五章では、これまで確認してきた虎表象が、虎御前の伝承の生成や展開にどのように影響を与えていったのかを論じた。特に、虎が雨の伝承は、動物の「虎」が降雨に関わってきた歴史的経緯が、「虎」御前が雨を呼ぶといった伝承に投影されたのではないかと想定した。虎が石については、「虎踞」「虎蹲」が、神聖な領域として守護された地の象徴でもあったことから、辟邪や鎮魂の役割も担っていたことを確認した。そのうえで、各地の虎が石の伝承は、境界を表す「虎の伏せた形に関与する石」の伝承が先行してあり、大磯の虎御前の話の流布とともに曾我兄弟と虎御前の伝承が付会されていったケースもあるのではないかと推察した。

論を進めるにあたり、『曾我物語』が真名本と仮名本という二つの系統を持つ作品であるという特徴を生かして、それらを比較する方法も用いた。

虎御前の始原的な姿を探るためには、関東文化圏で形成され、物語の構造を重視して作成された真名本を扱うのが妥当であると考えた。そこで、真名本の成立圏に比定される箱根や伊豆をはじめとして、虎御前と深い関わりのある大磯の特性について調査することで、作品の一つの特徴でもある在地的リアリズムによる影響や、成立圏である箱根・伊豆といった霊山と大磯との関係の重要性を再確認した。それらを踏まえ、大磯の異国性や渡来性に由来する異界的な空間性が、虎御前の登場や活躍に説得力を持ったのではないかと言及した。

一方で、虎御前伝承の展開について知るために、現存の仮名本『曾我物語』をはじめ、浄瑠璃や名所記などといった近世の作品を検討対象とし、虎御前の伝承がどのようなイメージで捉えられていったかについて述べた。

以上のことから、『曾我物語』の虎御前像には、動物の虎表象が投影されているといった可能性を提示し得た。本論文を通じて、「虎」の名を持つ虎御前という女性に対する伝承受容者の憧憬が、虎御前伝承の流布の背景にあることも論究し得たと考える。

注1 『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会 一九八三年八月。また、『古代東アジア世界と日本』（李成市編 岩波書店 二〇〇〇年九月）も参照。

2 「老女化石譚」『柳田國男全集』第一一巻 ちくま文庫（一九九〇年）所収『妹の力』（初出一九一六年八月）。

3 「『曾我物語』大磯の「虎」命名についての覚書」『中世文学研究』第二二号 一九九六年八月、『『曾我物語』その表象と再生』（笠間書院 二〇〇四年一月）所収。

4 「妙本寺本曾我物語攷」『妙本寺本曾我物語』貴重古典籍叢刊 角川書店 一九六九年三月。